

スピリチュアリティ研究における質的研究手法の一考察

—暗黙的な様相の解釈を中心に—

○ 西南学院大学大学院人間科学研究科 博士後期課程 夏秋 圭助 (008928)

賀戸 一郎 (西南学院大学・001374)

スピリチュアリティ、質的研究手法

1. 研究目的

本研究は、主要な質的研究手法を参考として、スピリチュアリティ（心の核など）やそのケアの研究における研究証跡の確保や解釈における視点などの考察を目的とする。特に、ケアにおける親身さなど、明確な研究証跡が得にくい暗黙的な様相について、質的研究手法による帰納の可能性を模索する。ただし、かねてより議論されている科学と非科学の線引き問題などの考察よりも、スピリチュアリティ研究における質的研究手法の傾向や特徴の整理を中心に据えた。

そして、スピリチュアリティ研究における客観性を確保しながらも、暗黙的な様相に可能な限り歩み寄る柔軟性を模索したい。合せて、認知症や終末期の人に関する研究など、隣接研究分野において人々の幸せや福祉の追求するにあたって、質的研究手法による糸口を模索する。

2. 研究の視点および方法

スピリチュアリティなど暗黙的な様相を考察するにあたって、質的研究手法は多様に存在するが、用いるためにはその材料となる研究証跡が必要となる。しかし、認知症の人や終末期の人などの暗黙的な様相においては、明確な研究証跡が得にくいことも多い。この暗黙的な様相の課題に対し、質的研究手法、および必要となる研究証跡を改めて考察することとした。特に、主要な質的研究手法における研究証跡、分析の柔軟性、および客観性の確保に関する視点を整理することで、適合性や特徴を整理する。

まず、CiNiiに登録されている論文のうち、主要な質的研究手法を用いた文献について、暗黙的な様相への視点でそれぞれ必要数選定し、特徴を整理する。次に、整理した特徴から、研究証跡が客観的に解釈されるための帰納過程から、その視点について考察する。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究によって行う。文献研究においては、日本社会福祉学会研究倫理指針「学会発表」の規定を順守するとともに、文献の引用については、厳密な倫理的配慮を心がけた。なお、引用文献については、当日配布資料で別途紹介するものとする。

4. 研究結果

主要な質的研究手法の多くは、口頭データ、視覚データ、記述データなどに対する分析を中心としており、かつ、客観的に解釈しやすい研究証跡を選定して分析を行う。しかし、暗黙的な様相への配慮が必要な場合は、より繊細かつ柔軟な質的研究手法や研究証跡の選定が求められる。そのため、対象者本人の口頭によって明確に表出されたデータのみではなく、文脈や生活の背景など様々な要因を多面的に解釈することが必要となる。

こうした暗黙的な様相への配慮は、エスノグラフィーなどの視点も認められる。しかし、口頭データの分析にあたって、口頭データ外の様々な要因を解釈に加えることは、反証可能性などの客観的な側面を損ないやすい。

こうした課題について、S C A T (Steps for Coding and Theorization) は、明示的に分析や解釈の過程を示すことによって、研究証跡に対する妥当性が確認できるという視点から客観性を補っている。特に、口頭データに、テキスト外の概念を明示して解釈の過程を示す方法は、他の質的研究方法には見られない視点である。この視点を応用することが出来れば、スピリチュアリティ研究において、新たな一側面の考察が可能になると考えられた。

5. 考察

質的研究手法は研究証跡に対する分析の手法であるが、明確な研究証跡としての口頭データは、臨床に存在する多様な要因の一部である。その分析のみでは臨床を理論上に再現することは難しく、科学的であろうとすることがジレンマとして生じることは少なくない。

そのため、まず、暗黙的な様相で得られた様々な感覚や情報の中から、研究証跡として、新たに用いられるものを考察しなければならない。特に、認知症の人や終末期の人など、本人による口頭データが得にくい場合、スピリチュアリティを考察するためには、生活や背景などの様々な関連情報が重要となる。例えば、看取りなどの議論でも参考に上がるが、本人と深く親身である者の口頭データなどから、本人のスピリチュアリティに迫る様相が示される場合、これは推定の要因となりうるだろう。そして、多面的に推定することで確からしさを担保するためには、関連情報を蓄積することが求められる。

次に、様々な関連情報を研究証跡として用いるにあたっては、分析の方法や価値を多面的に整理し、より客観的に明示することが求められる。S C A Tの分析の妥当性の確認など、基本的な客観性を担保しながら解釈の柔軟性を高める視点は、客観性の要求に応じながらも、実践につながる多面的で柔軟な考察を可能にすると考えられた。

残念ながら、本研究において具体的な応用や方法を示すことには至っていないが、今後の研究の課題として努力したい。